

好きな事を仕事にして成功し
自由になった元派遣社員の物語

「はじめに」

僕は専門学校だった頃、過呼吸症候群になった。

理由は定かではないが、突然やってくる呼吸の苦しきは恐ろしく辛かった。

その後、目にも異変が起き始めた。

空を見上げると、青空がチカチカして見えて次第にミミズの這ったような模様が現れて来たのだ。

これにはかなり恐怖を感じ、速攻で医者に行った。

初めは眼科。しかし精密検査をしても異常は見つからない。眼科の先生は脳に原因があるかもしれないからと脳神経外科病院に紹介状を書いてくれた。

そして精密検査。MRI という装置に縛り付けられ20分ほどじっとしていた。そして検査の結果・・・

異常なし（汗）

医者が言うには、精神的なものだと思うから症状が出たら、大人しく安静にするしかないと言われてしまった。

そして専門学校を卒業。

バブルが弾けるのが近づいていたが、就職した会社は

とても忙しく、激務だった。
技術社員として入ったので、入社して3ヶ月で同期の社員6人ほどが
工場長直々に技術的な勉強をしてもらえる事になったのだ。

勉強は朝8時30分～夕方の5時30分まで。

最初は、お金をもらいながら勉強させてもらえるなんて
なんてラッキーなんだと思った。

しかし・・・

それも長くは続かなかった。

なぜなら、段々と工場長の態度が変わり内容も難しくなり
課題を与えられるようになった。
ここは電気・電子系の会社だったので図面を見て、パターン設計を
するように命じられた。学校である程度は学んでいたもので
多少の知識はあったものの、この課題は僕にとっては、
あまり準備が出来ないままフルマラソンを走れと
言われているようなものだった。

一瞬、やりたくないと言いそうになったが
会社を首になるのを恐れて、一生懸命に歯を食いしばり頑張った。

この作業は深夜に及ぶこともあった。
日付が変わっても、会社にこもりほとんどの社員が帰った中で
新入社員6人が、黙々と机に向かって作業をする姿は今、思うと
異質の光景だったと思う。

それだけ働いても研修中という事で、残業代は一切出ない。

作業を強制されている訳ではないが、課題の期限は決まっていたので出来なければ、深夜になって徹夜してでも終わらせなければならない。

ただ、その猛烈なプレッシャーのおかげか、学生の頃になった過呼吸は収まっていた。その事すら忘れしまうほどこの課題は恐ろしくハードルが高かったのだ。

趣味も、遊びも、夢も、恋愛も、すべてが後回しだった。そんな事をする余裕すらなく、会社と家をただ単に往復するだけの日々。それでも、せっかく入れた会社だからと言う僕の小さなブライドがなんとか難関の課題を進める原動力になっていた。

その反面、僕は毎日自由に憧れながら働いた。

好きな事をしたかった。

趣味を思いきり楽しみたかった。

たまには定時で帰って、のんびりしたかった。

大好きな車やバイクに乗って旅行に行きたかった。

一度きりの人生が、ただやりたくもない仕事のために遠ざかっていくと思うと、たまらなくむなしい気持ちになった。

20歳の僕の生命力が日々、少しずつ削れていくような気がした。

そして3ヶ月が過ぎた。
一応、課題はクリアしたものの工場長の判断で
生産課へ配属された。

2年間専門学校で専門の知識を学び、その学費を親が必死になって
働いて払ってくれたにも関わらず、僕は技術課ではやっていけないと
判断され、愕然と大きな挫折を味わった。

この2年間は一体なんだったのだろうか？
深夜まで必死になって頑張り、努力したのになぜ？

僕は初めて、会社や社会の厳しさを目の当たりにした。

それから時はあっという間に過ぎ去り数十年が経っていた。

僕はある日ネットサーフィンをしていて、副業の存在を知った。

僕にはビジネスの知識はほとんどなかった。

パソコンスキルはネットやメール、エクセルの基本が少々出来
HPの作成も、初心者レベルで簡単なHPだったら出来る程度のスキルは
持ってはいたが・・・

人脈はないし、資金もほとんどなし。
正直、怪しいとも思っていた。

でも自由になりたい、お金が欲しいという気持ちが
勝った。

副業というビジネスに取り組み初月で6,000円稼いだ。
自分の力でお金を稼ぐ楽しさを改めて経験した。
4ヶ月後、月収は10万円を超えた。
副業は本当に稼げると知って僕は舞い上がった。

この調子でいけば派遣社員として雇われて、いつ契約を切られるのか
びくびくしながら働かなくても良いと思った。
そして何より僕の最も欲しい自由が手に入るかもしれないと思った。

日々アフィリエイトビジネスの勉強をしながら、コツコツと
活動を続けた。

その数ヶ月後に月収は30万円を超えてしまった。

僕も家族も、この出来事に呆然とする。
時給1,100円の元派遣社員のもとに、見たことのない大金が
舞い込んで来た。
ただの偶然かと思ったが、そうではなかった。

永遠に僕は会社にこき使われて働くだけの人生かと思っていたが
そうではないという希望が出てきたのだ。
ドライブに出掛けて帰ってくると数千円という利益が勝手に
確定して状況に遭遇した。

時にはサラリーマンが1週間かけて稼ぐ金額をたったの数時間で
報酬を得たこともある。

わずか1年で、これほど見事に人生がひっくり返るとは
思ってもみなかった。

もともとビジネスはたいした興味はなくビジネスよりもバイクや車に乗っていたほうが、遙かに幸せだから少しだけペースを落として活動していこうと思う。

1日に仕事に費やす時間は、平均して1時間〜3時間ほどだし朝、起きて天気が良かったらドライブに出掛けることが多々ある。
(もちろん頑張る時期もあるが)

そんな生活をしていても収入はきちんとあり今や好きな事をして生活するための仕組みを作り収入が発生するようにしたからだと思う。

正直今はこの自由な生活が当たり前になってきて雇われて働いていた時の辛さや苦しみを少しずつ忘れつつあるのを感じる。

でもあの頃の辛さ等は、僕の人生で絶対に忘れたくないものの一つだ。

だから完全に忘れてしまう前に、僕が歩んできた道のりを詳しく書き残していこうと思う。

こんなごく普通の元派遣社員でも成功し好きな事を本業にしながら生活が出来るのだ！と、希望を持ってもらえたら嬉しい。

「僕の思考から雇われるという考えが消えた」

子供の頃は、父の影響もあって自動車整備士になるのだと確信していた。それは父の姿を見てカッコイイと思っていたし自分もあんな風になりたいと思っていたからだ。

高校までは比較的真面目で恥ずかしがり屋だった。先生や親の言う事を信じていたので、あまり無茶な事はしなかった。

スポーツテストで良い成績が出て褒められた時は素直に嬉しかった。中でも懸垂は学年で1位をとった事もあった。高校2年までは、虫歯ゼロで表彰されたこともある。

小心者だったので、学校のルールは厳格に守った。たったひとつだけを除いて・・・

それがバイクに乗る事だった。高校生になると、バイクを乗り回した。ただ、免許取得はせずクローズド・コースのみと言う条件付だったがそれでも、右手でアクセルを少し捻るだけで、スルスルと自分の思ったように進んでくれるバイクは僕の事を心から理解する友達のように思えた。

ただ乗れるだけで自然と笑顔になり幸せだった。

高校3年になり自動車整備の学校に行こうと思った。しかし、意外な事に父に猛反対された。

「自動車整備業界に未来はない」と言われてしまったのだ。

今でこそ、電気自動車やハイブリッドカーが増え、故障もほとんどしなくなっているから、父の言ったことが分かるが当時はまだそんな時代になるとは思っていなかったから、とても悲しかった。その後、父から電気・電子系の知識を身につければ将来安泰と言われられるがままに近くの専門学校に通うことにした。

高校の担任からは大学の推薦も受けられると言われたが自動車の免許を1日も早く取得したかった僕は、専門学校を12月に受験。そして見事合格。12月末には速攻で自動車学校へ入学していた。

高校時代は、陸上部で短距離のトレーニングに明け暮れた。日曜になると父に連れられ、モトクロスをしていた。モトクロスとは舗装されていない不整地のでこぼこやジャンプセクションをいかに速く走るかを競う競技だ。

僕はバイクに乗れるのが楽しくて仕方なく朝早くから夕方、日が沈むまで走り回っていた。

専門学校に入ってから、ノートパソコンを1人1台与えら授業で使われる事になった。とは言っても当時は1990年。ウインドウズが登場する前だったから、電源を入れて、友達からフロッピーディスクに入っている簡易ゲームを楽しむ毎日。

パソコンで出来る事はほとんどなく、ただ持ち歩いているだった。生徒の中にはプログラムなどを作るものも居たが・・・。

専門学校に行ったおかげで、通学のためにバイクの免許も取得。幸運な事に、学生の分際で車とバイクを自由に乗り回す事が出来た。それも全て父のおかげだ。

父はバイクに乗れない奴は男じゃない！という考えを持っていたので僕を早い時期からバイクに乗せてくれた。

当時はスポーツカー全盛の時代とあって週末になると車で山へ走りに行った。おかげで運転もうまくなり、ここでは書けないような運転をした事もある。

当時乗っていた車は、ワンダーシビックという1500CCの自然吸気エンジンだ。自分の手足のように走ってくれたので一番、思い入れの深い車だった。

次にスターレットEP71。走り屋の間では定番だった車だ。そして念願のR32スカイライン（タイプM）。たった1晩で、ガソリタンクを空にするほど走りまくった。

走る仲間も出来て、勉強も楽しかったし、資格もいくつか取得。恋もしたし、僕は青春時代を思いきり楽しんだ。

専門学校で過ごす時間はあっという間に過ぎ、2年になって就職を意識した。

バブル末期ではあったが、好景気が続いていたので僕は家から近いという理由で、会社を決めてしまった。本当は数社からお誘いがあったのだが・・・

この時、僕は有頂天になっていた。僕には才能があっというものの会社が、僕をほしがっていると・・・。

しかし実際に就職し社会の厳しい洗礼を受けることになる。

僕は働いて、帰ってきてご飯を食べて寝るだけの家畜同然の生活を日々、送っていた。技術社員として入社したので、朝早くから夜遅くまで

働いた。会社から命令された事には一切逆らえなかった。
同僚も、この厳しさに耐えきれず辞めていくものが
出始めた。

僕はこのまま定年になるまで40年間、この会社にこき使われて
働くだけの人生だと思うと絶望と恐怖が心を支配した。
とても怖かった。まさに奴隷の世界だと思った。
現に上司は、僕たち社員を人としてではなく、ただ言う事を聞くだけの
ロボットにしか思っていないと、風の噂で聞いた時は
怒りと絶望で、頭がおかしくなりそうだった。

専門学校での楽しい思い出はすっかり忘れていた。

専門学校2年生になると、学生たちの話題はどこに就職するのか？
という話で持ちきりだった。

合同企業説明会、面接の練習や、三者面談など・・・

僕もその流れには逆らえずに、皆と同じ方向へ進んでいった。
当時は、就職するのが当たりだと思っていた。
でも本音は、とても嫌で仕方なかった。

専門学校は午後4時過ぎには終わるから、家に着くのは
午後4時30分ごろ。その後は僕の自由時間だった。

バイクや車を洗ったり、近所の河川敷へ行っては
夕日を眺め、川の流れにうっとりしながら自然の中で
過ごす時間がとても楽しく幸せだった。

しかし就職してしまうと平日は、これらの事が一切出来なくなってしまう。
そんな危機感を感じてはいたものの、世間の流れには逆らえなかった。

就職こそしたものの、考えるのは自由を得るためには
どうしたら良いかを考えるばかりで、仕事に身が入らなかった。

そんな毎日だったから、仕事も転々とした。

しまいには不景気の波にもまれ、年齢も 30 代後半になり
正社員の道は完全に絶たれてしまった。

僕はない知恵を絞り必死になって考えた末、派遣社員への道を選
びことにした。

幸い、就職は出来た。仕事も楽しかったし、人間関係も良好で
待遇もよかった。しかし、そこも企業の経営悪化と期間満了で
仕事を失う事になる。

唯一の希望でもあった派遣社員もダメになり、仕事を必死に探すも
希望する仕事には就けず、僕は落胆し疲れ果てていった。

僕の人生は 40 歳を目前にして早くも晩年にさしかかり
ただ死を待つだけの老人になったようだった。

とにかくお金が必要だった。

そして僕はネットを利用して自分の好きな分野、得意な分野で
生活をする事にした。これが最後の望みだった。

わずか 4 ヶ月で、以前のバイト収入を超えた。

僕は面食らった。

それに伴い、ネットビジネスの勉強を本格的に始めた。

数ヶ月後に月収は 30 万円を超えた。

僕は最後の望みを掛けた勝負に勝利したのだ。
僕の人生から雇われるという考えが消えた。

過酷な労働と苦しみが消えた。

人間関係の悩みが消えた。

残業が消えた。

我慢や苦痛が消えた。

首になる恐怖が消えた。

期間満了の心配が消えた。

時間の縛りが消えた。

通勤の苦勞が消えた。

上司に良い顔をするのが消えた。

同僚に気を遣うのが消えた。

気付けば色々な義務がなくなり
時間とお金がある程度、手に入った。
毎日が日曜日だ。

朝、起きたら1日が自由時間。
好きなように使える。

それまで抑えてきた気持ちが少しずつ沸き出して来て
今まで目の前にあった不幸の泉が跡形となく消え去り
代わりに、幸せと自由の泉が目の前に現れたのだ。

「どこまでも続く自由と幸せな日々」

時間と自由を手にした僕は、
自分の思うがままに行動し楽しむ事にした。

ある時、自然豊かな緑に囲まれた温泉へ行った。
平日という事もあり、昼間はほぼ貸し切り状態。
居るのは老人だけだった。

お風呂上がりに、恒例のコーヒー牛乳を片手に
右手を右腰に手をかけ、ぐいっ！とひと飲みする。
乾いた喉に、キンキンに冷えたほんのり甘いココアの
あるコーヒーが体全体に行き渡った。

“うまい！！”

僕は思わず、心の中で叫んだ。

こうしている間にも、多くの人はやりたくもない仕事を
我慢しながらしているのだと思うと少し心が痛んだ。

休憩所で休んでいると、温泉客がなにやら話を
していた。いけないとは思ったが、聞き耳を立ててみた。

「俺は40年会社の為に尽くしてきた。
なのに最後は雀の涙ほどの退職金と花束ひとつだけ。
せっかくもらった退職金も、家の借金でほとんど消え
老後の生活はどうしたものか・・・

年金も少子化であてにならんし、もらえても俺の場合は

わずか数万円さ。この先、どうやって生きていけばいいのかね」

それを聞いた僕は、ふと現実に戻った。
少し前の僕も、会社に雇われていたら将来は
このおじいさんのようになっていたかと思うと身震いがした。

せっかく温まった体も、この会話ですっかり冷えきってしまい
僕は温泉を後にしたのだった。

久しぶりに実家へ帰ってきた時、中学の頃からの友人と遊んだ。
数年ぶりの再会にお互い喜んだのだが、彼は当時よりも疲れた顔
をしていた。

彼もまた、会社員として日々一生懸命働いていた。
将来への不安と給料の安さに不満や愚痴をこぼしていた。
彼が一生、雇われる側に居る限り、この不満や愚痴がなくなる事は
ないだろう。

僕が彼に出来るのは、希望という道をさりげなく渡してあげる事だけだった。

「24 時間自由時間の憂鬱」

僕は元派遣社員で期間満了で職を失った。
職を失い自由な時間が出来た僕は、以前からしていた副業を
本業にして生活する事をするという夢を頂き、必ず叶えると決意した。

そして、あっさりと願いは叶ってしまった。

こんな風に書くと、反感を買うかもしれないが
突然飛び込んで来た自由な時間。

朝から夜まで、誰にも気兼ねなく自分の好きなように
時間を使う事ができる。

1 年ほど前までは、僕は派遣社員で働いていた。
通勤に 1 時間、残業は 3 時間や 4 時間は当たり前の会社だったから
1 日のうち大半は会社で過ごしていた。まさに仕事漬けの毎日。
仕事が忙しく日付が変わってから帰宅した事もしばしばあった。

休日出勤も普通にあった。
多い月は 3 回も・・・

そんな生活をしていた僕が職を失い副業を本業にしてから
数ヶ月後、自由な時間とお金が手に入った。
僕を信頼し頼ってくれるお客様にこの場を借りて心を
お礼を申し上げます。ありがとうございます。

365 日、24 時間。
すべての時間が、自分のために自由に使える状況を想像してみて欲しい。

まさに、この世の天国とはこう言う事を言うのだろう。
こんな天国のような状況が、まさかこんなにも早く現実になるとは
夢にも思わなかった。
僕が心を込めて書いたブログやメルマガが僕の代りに
よく働いてくれた。

旅行中に数万円の報酬が発生していた事もよくあった。

こうなると外で働く必要がなくなるので
運動不足解消のために自転車を買った。

大好きな漫画の本を全巻大人買いして夢中になって読んだ。

そうしている間も、これは夢なのか？と思うことが
度々あった。なんだか不思議な気分だった。

朝は好きなだけたっぷり寝たり、わざと朝早く起きて
2度寝をして昼まで寝てみたりした。
お腹がすいた時に食べたいものを好きなだけ食べたりもした。
興味のある車やバイクのサイトを好きなだけみても
1日の時間はまだたっぷりあった。

24時間、自由な時間。
なんて素晴らしいのだろう！！

以前は、好きな事をするために、したくもない仕事をして
ほんの僅かな給料をもらい生活費をギリギリまで節約し
数ヶ月かかってやっと貯めたお金でバイクや車のパーツを買っていた。

好きな事を好きな時に思う存分楽しみたい。

たった一度きりの人生に与えられた時間を自由に気兼ねなく使いたい。

そうした生涯をかけて叶えたいと思っていた夢をあっさりと実現してしまった僕は、ふと我に返った。
言葉に言い表せない幸せが心の中に広がっていった。

その一方で、
友人は平日、仕事をしていて遊べないし、
一人だけの時間をかなり持て余していた。

車に乗って好きなだけ好きな所へ出掛けた。
食べたいと思ったものを好きなだけ食べてみたり
自転車に乗って、散歩をして自然を満喫したり
温泉にも行ってみた。
バイクに乗って、神社巡りもした。

平日の昼間は老人ばかり。
混雑する土日を避けて旅行も行った。
どの観光地も、老人ばかりで溢れかえっていた。

彼らはしわくちやの顔で笑ったり騒いだりしていた。
僕の周りには老人ばかりになってしまったと思った。
定年より遙か前から、自由になるのは悪くないと思った。

「少しでも多くの人に幸せになってもらいたい」

僕は24時間自由という素敵なものを手に入れた。
おかげで、心にも余裕が生まれ、この幸せを
多くの人に味わってほしいと思うようになった。

仕事に追われていたころは自分の事で精一杯だったが
人のために何かをしようというのが、楽しくて仕方がないのだ。

僕と関わる人が、毎日楽しく自由に幸せな日々を過ごしてもらえたらと
思っている。
このように書くと、信じてもらえないかもしれないが
これは僕の本音なので、仕方がない。

僕は好きな事を本業にして自由になる！と決めて
見事、その願いを叶えた。
まだまだ夢はあるが、夢は人に話すと叶わなくなると言われているので
ここではまだ秘密にしておこうと思う。

僕は名声や名誉には一切興味がない。
好きな事を思う存分出来る自由な時間と豊かさがあり
健康で幸せであれば、それで良いと思っている。

そんな僕の生き方を憧れる人も居るだろうし、そうでない人も
居るだろう。それは個人の自由だと僕は思う。

「上昇気流に乗る家、父から学ぶビジネスマインド」

戦時中に父は生まれた。
父が生まれて2年後、終戦を迎える。

高校を卒業すると同時に陸上自衛隊に入り
数年間の訓練を経験した後に急遽、父の兄が経営する
自動車整備の仕事を手伝うことになる。

ちょうどバブルの最盛期もあって
店の利益が右肩上がり業績を伸ばしていった。
父は家族のために朝早くから夜遅くまで働いた。

休みは日曜のみ。それ以外はずっと働き詰めだった。
父が仕事を終えて帰ってくるのは夜の10時か11時だった。

それから、ご飯を食べて風呂に入り
母に手伝ってもらいながら、資格をとる勉強をした。
その資格とは2級整備士。

自動車整備の会社を経営するには、2級整備士が1人
3級整備士が1人、最低でも居る事と決められている。
そして父は、自分の兄（経営者であり社長）を助けるために
夜遅くまで働き帰宅して勉強をして血の滲むような努力を重ね
資格を取得したのだ。

ただし学科だけでは、この資格を取得する事はできなかった。
経験が居るのだ。詳しいことは分からないが一定時間の経験をして
やっと2級整備士の資格が与えられる。とその前に3級整備士の
取得もしないといけなかったらしい……。

父は、激務の中で同じ血の流れる兄の為に自分の命を捧げたのだ。
何という兄弟愛だろうか・・・。
ほとほと感心するばかりである。

無事に2級整備士の資格を取得し3級整備士は兄の嫁さんが取得。
ようやく合法的にお店を経営できるようになり、父は益々忙しく働いた。

僕が大人になってから父から聞いた話だが、あまりの仕事の忙しさに昼飯を抜くことも、日常茶飯事だったらしい。
体を酷使し過ぎたせいか、床に落ちた工具を拾うのも苦勞するほどだったらしい。あの時は、大変な時代だったと話をしてくれた。

そんな激務が数年続いたある日の事。
父は無理がたたって入院をしてしまった。
胆嚢結石（たんのうけっせき）を発病し手術をする事になった。
当時はまだ、医療も発達していなかったので
父は命の危険を感じたそうだ。

父曰く、まだ幼い僕（当時5歳）と妹（当時3歳）、母を残して死んでしまうのか？と本気で思っていたらしい。

手術は、父のお腹を15cmほどメスを入れて開き、結石を取り除くというものだ。お腹が相当痛むらしい。

幸運な事に手術は成功し、仕事に復帰できたのだが
それから30数年後に、大変な事になるとは父も予想していなかっただろう。

この件に関しては後ほどお話するとして、父は自動車整備の仕事をする中で、ビジネスの基本を自然と身につけて行っていたらしい。

中には身につけなくても良かった事もあるのだが、まずは身につけて良かった事。

それは、“笑顔”とお客さんの気持ちになって接客する事が大切と話をしてくれた。

お客さんを、まずは笑顔で迎え、お客さんの要望をしっかりと聞いて要望以上の仕事をする事が大切だと教えてくれた。

父は、そのおかげでお客さんの心をしっかりと掴み、店はどんどん繁盛していったのだ。

多くのお客さんが父を慕い信頼してくれた。

僕も今、父が行なってきた事を見習って仕事をしている。

お客様に信頼してもらい、喜んで頂けることを大切にしている。

反対に身につけなくても良かった事。

それは“苦勞”だ。

父は僕に“若いうちに苦勞は買ってでもしろ”と

毎日のように言っていた。苦勞してこそ、成功すると・・・

幼い僕は、その言葉を素直に受け入れ信じた。

そのおかげで、僕が社会人になった際は、案の定苦勞ばかりの人生が待ち受けていたのだった。

さて今の父はと言うと、70歳を過ぎても仕事を続けている。

だが、つい最近大変な事が起きた。

実は、大腸癌だった事が判明したのだ。

あげくの果てに、腎臓近くの血管に1cmほどの腫れが見つかり

この血管が破れると、命が危ない。

まずは大腸癌の手術を受けた。人生で2回目のお腹を切られる手術だ。父曰く、人生で2度もお腹を開かれるとは思ってなかったと術後、笑顔で話をしてくれた。

大腸のごく一部のみの癌だったので、そこを取り除き手術は無事に成功した。他には転移していなかった。その癌になった部分は、癒着していてカチカチに固まっていたらしい。医者からは昔、腎臓結石の手術をした事が原因で、大腸の一部が癒着していたらしい。

後は腎臓の血管の腫れが気になるころだが、定期的に検査をしながら様子を見ることになった。

僕は父の人生をずっと見てきて、つくづくこう思った。家族の為に飯を食わしていくために自分の体を酷使して頑張ってきた。そんな父を僕は好きだし尊敬する。すごいと思う！

ただ、僕が父と同じように体を酷使して自分のやりたい事が全く出来ず働き詰めの毎日を過ごすのは、絶対に嫌だと思った。父の体は癌に冒され、体はボロボロだ。

家族の為に一生懸命に働き飯を食わせてくれた事は心から感謝しているが・・・

ひとつ不思議に思う事が実はある。普通、あれだけの激務をこなして疲れ果てて帰ってくる父が僕や家族に対して、不機嫌な顔を1度たりとも見せた事がない事だ。

朝7時から夜は8時9時、おそい時は11時まで仕事をこなして仕事から帰ってくる父の顔は、いつも笑顔だった。僕は思った。家族への愛が父を支えていると・・・何度も言うようで申し訳ないが、僕は父を尊敬している。

「地獄のような労働の日々」

僕が危機感を感じネットビジネスの世界に入ったのは労働への恐れだった。

父が一生の大半を仕事に費やしあげくの果てに胆嚢結石や大腸癌などになり体を酷使する事の恐ろしさを嫌というほど、目の当たりにしてきたからだ。

僕が経験した最初の労働は専門学校を卒業した 20 歳のときだ。

バブル末期だったが、働く会社に一切、不自由はしなかった。学校を卒業すれば、会社に雇われ働くのが当たり前だと思っていたし今のようにネットビジネスや起業をして食べていくなんて選択肢は全くなかった。

家から 10 分ほどにある、とある電気系の下請け会社に正社員として入社をする。

待遇もそれなりも良くて、8 時間の基本労働と残業を数時間して 1 日で 10,000 円ぐらいにはなった。

当時の僕からしたら、10,000 円は大金だったし(バイクのタイヤが 1 本買える)月末には税金等が引かれて 15 万円前後の給料が振り込まれた。

少し前まで学生だったので、こんな大金を手にする機会は人生で初めての事で、最初は嬉しくて飛び上がって喜んだものだ。

職場の環境は、ある意味素晴らしかった。女性がほとんどの会社だったし当時、彼女が居なかったので正直に言えば、出会いもほんの少し期待していた。

技術社員として入ったのだが、最初は生産ラインを経験させられた。ラインと言うのは、同じものがベルトコンベアで運ばれ、組み立てなど同じ事を永遠と行なうものだ。僕は最初、なんて楽な仕事なのだと喜んだものだ。

しかし、そんな喜びも長くは続かなかった。何も考えずに出来る作業に、飽きて来てしまったのだ。同じ物が流れ、同じ作業の繰り返し。

時間が経つのは、恐ろしいほど遅く感じ、まるで神様がいじわるして時間を止めているのではないかと思うほどだった。

入社して3ヶ月が経ったころ、生産ラインでの経験もなんとかこなす事ができるようになった。相変わらず単純な作業に苦痛ではあったが・・・

ちょうどその頃、工場長の提案で僕たち技術社員として入社した6人を技術研修させる話が舞い込んできた。僕は生産ラインに嫌気がさしていたので、大喜びした。

翌日から、技術研修が始まった。僕たち6人は、工場長から直々に電気・電子技術に関する専門知識を学ぶ機会を与えられたのだった。

しかもお金をもらいながら、勉強させてもらえる事はこのうえなく楽だと思った。

しかし・・・

会社はそんなに甘くなかった。この日から地獄のような日々が待ち受けていたのだ。

研修は基礎学習から始まり、電気・電子とは？から始まり
電気・電子に関する公式などを徹底的に学んでいった。
正直、学校で教えてもらうより、こうして現場の第一線で働いている
工場長の講義のほうが、遙かに分かりやすく面白かった。

ただし、研修も佳境に入り、ある大きな課題が与えられた。
それは電気・電子図面（A3ほどある）を見ながら、基板を起こすことだった。

分かりやすく言えば、見習いの料理人が2週間で
料理の鉄人に勝て！と言われたようなものだ。

多少の知識はあるものの、実戦の全くない“ひよっこ”が、
たったの2週間でプロに勝てるわけではないだろう。

ここで人生初の挫折を味わう事になる。

必死になって課題をクリアしようと努力したし、これ以上頑張れないと
言うぐらい頑張った。6人の“ひよっこ”たちは、この難解な課題をクリアする
ため深夜まで会社に残ることも、しばしばあった。夜中の2時、3時ぐらい。

しかも研修中と言うこともあって、残業代は一切出ないし
会社側は、残業は強制しないから帰っても良いと言う。
しかし定時で帰ったら、課題はどうもクリアできない。

この2週間は地獄だった。睡眠もろくにとれないまま
土日も、家で課題をクリアすべく取り組んだ。

しかし、その努力もむなしく課題はクリアしたものの
技術社員とは使えないと判断されてしまった。

僕は技術社員失格の烙印を押されてしまった。

6人中、技術課に行けたのは4人。さらに4人中、後に2人は会社を早々に去ることになる。一人は過労で退社時に事故を起こし退職を余儀なくされた。

もう1人は、この過酷な労働環境に耐えられず転職した。

そして僕はというと、あの退屈な生産ラインに配属となった。解雇にならないだけよかったと自分を励まし毎日、来る日も来る日も同じ事の繰り返しの作業を我慢して続けた。

退職という文字が頭の中をよぎったが、会社を退職する勇気はなかった。なぜなら、多額の借金を背負っていたからだ。正社員になったのを良い事に、入社してすぐに200万円もする車をローンを組み買ってしまったのだ。

毎月3万円のローンに加えてボーナス時期は10万円。これが5年も続くのだ。この借金がなければ、こんな会社とつくに辞めていただろう。

しかし悪い事ばかりは続かなかった。この会社の子会社に3ヶ月だけ出向という形で行ってくれという話があり、それに従った。そこは規模こそ小さいものの、労働環境も良く雰囲気も素晴らしく良かった。上司も僕を丁重に扱ってくれて信頼してくれた。

それがとても嬉しくて、仕事をがむしゃらに頑張った。技術社員としては、失格となったが生産ラインをまとめるリーダーとして抜擢され上司からの評価は益々良くなっていった。

会社の業績も良かったし、残業は多くても1時間か2時間に減ったので本社に比べてずっと働きやすかった。リーダーに抜擢されてからは給料も上がり、ボーナスは7月に銀行振り込みで8月にも夏休み前に現金で支給された。

夏休み前に封筒に入った30万円近くの札束を手にした時は
なんとも気持ちが良いものだった。

しかし待遇はよかったが、危険がいつも付いてまわった。
それは工場で使用する鉛。この工場は半田付けという作業がメインの職場だっ
た。半田付けをする鉛からは煙が立ちこめ、工場の換気はフル稼働していた。
しかし、それで全てが安全と言うわけでない。(法律で定められる設備は導入さ
れているが・・・)

この鉛からの煙と言うのは実にやっかいな代物で、皮膚を通して体に入って
悪さをするからだ。特に大量の鉛を含んだ半田槽という電子基板に付いた
数々の部品を次々と半田付けする機械のメンテには危険が伴う。

カバーを定期的にかけて、半田カスというゴミをよける仕事があるのだが
常に鉛からの煙が立ちこめ、それを吸うと体内に蓄積して内臓疾患を起こす
可能性が高くなる。安全マスクは当然、着用するがある一人の上司が
それが原因か定かではないが、腎臓に以上が見つかり薬を飲んでいる話を
聞いて、身震いがした。

僕もあと10年もすれば、この上司のようになるかと思うと
怖くてたまらなくなった。

*現在は安全管理が徹底され、法律に触れるような事にはなっていないらしい。

それでも高額なローンがまだ残っているので、すぐに辞める事は
出来なかった。と同時にある資格をとってから会社を辞めようと思ったのだ。
技術社員では落第。そしてもう正社員として人に雇われるのは2度と
ごめんだ。という思いで起業したいと思うようになった。

当時、父のお客さんが税理士をしていて独立して年収1千万を超える収入が
あると知り、適性も考えずに資格を取得するべく、働きながら猛勉強を
開始する。

まずは税理士事務所で働く必要がある。そのためには資格がいる。
日商簿記2級取得が最低条件と聞かされて、3年掛けて資格を取得。
その頃にはローンも終わり、いよいよ退職届けを出した。

無謀にも、次の内定も決定しないまま・・・
これが後になって、僕自身の才能を開花させる事になるとは
思いもしなかったが・・・。

この会社に入って、あれほど嫌だと思っていた父が経験した
過酷な労働以上の労働を自分が経験する事になってしまった。なんとも皮肉な
ものである。

「子供達の笑顔は太陽のように眩しかった」

以前の会社を退職後、僕は日商簿記2級の資格を武器に就職活動を開始する。夢は税理士になって独立し、年収1千万円を稼ぐ事。

27歳の時だった。

しかし当時は、バブルが弾けてどこも不況の嵐が吹いていた。当然その嵐は就職活動を難航させる事になった。日商簿記2級の資格さえあれば、税理士事務所に入社するのは楽勝と思っていたのだが世間はそんなに甘くなかった。

この大不況のおかげと27歳という歳では、どの事務所も経験者しかいらないうのだ。僕は人生2度目の挫折を経験した。もちろん、くじけず就活はした。電話帳に掲載されている税理士事務所へ片っ端から電話を掛けて、面接してもらえるように頼み込んだ。

しかし、その努力もむくわれないうまま、ただ時間が過ぎていくばかり。ついに退職金も使い果たし、失業保険も後1ヶ月で打ちきりとなるそんな状況で出した答えがこれだ。

それは、自分の得意な事、好きな事をして仕事をする。そう考えた時に、中学生のころ大好きだった器械体操を思い出した。レギュラーにもなり、大会では入賞こそ逃したものの、チームで一番の成績を跳び箱（体操の世界では跳馬という）で叩きだした事もある。

「そうだ！体操を子供たちに教えたい」

もうこれしかない、と意気揚々と求人誌をかき集めて募集欄をくまなく探したのだ。そうすると1つだけ“体操インストラクター募集”とあるではないか！！ さっそく電話を掛けると面接をしてもらえる事になった。

体操経験者と言うことで、めでたく就職が出来た。
雇用形態はアルバイトという位置づけだったが・・・

こうして子供たちに体操を教える仕事を開始する。
マット、鉄棒、跳び箱と3種類の種目を教えるだが
経験があった事もあり、仕事はどんどん覚える事が出来た。

子供からは、“タカ先生”と慕われ子供の親からも
慕われる存在となっていた。

1日に午前2回、午後から4レッスンあるのだが、そのうちの1レッスンの
チーフ（リーダー）をさせてもらう事も出来て充実した日々を
過ごす。

給料は、めちゃくちゃ安くて正社員並に働いても
手取りは10万ぐらいだった。

それでも、仕事が楽しいと思えたのは初めてだったので
好きな事で仕事が出来て、子供達や親に喜んでもらえるのが
何よりもうれしかった。

しかし数年後、体操の発表会（子供達の1年の成果を発表するイベント）で
先生達のデモンストレーションで、大技を見せるのだが、準備不足で
技を失敗してしまい、左足首の靭帯損傷という大怪我をしてしまう。

1ヶ月間、自宅待機をよぎなくされた。
その時、思ったのは怪我をしたら働けなくなり、収入もなくなる。
しかも体力勝負の仕事だから歳を重ねる事に指導するのも辛くなる。
将来性はないなと思った。

その後、復帰したものの職場の人間関係が悪化。
ある社員と意見の衝突が増え、またもや技の練習中に今度は両足首を
捻挫してしまい、松葉杖を使わなくては歩けなくなってしまった。

また1ヶ月の休みを余儀なくされた。

この怪我の事もあり、このままでは体が持たない。と危機感を感じ
さらに自分のやりたい事も出来たので、退職。

新しい世界へと飛び立つ事になる。

このとき、まさか自分が大金を動かす仕事をする事になろうとは思ってもみなかった。

「容赦ない株の世界へようこそ」

体操教室を辞めた僕は、しばらくは自由な時間を楽しむ事にした。

朝は寝たいだけ寝て、昼前に起きる。
お昼を簡単に済ませて、テレビを見てケラケラと笑ったり
愛犬を連れて、近所の河川敷へ散歩に行った。

柔らかいクッションのような土の上をゆっくりと
歩き、大地を噛みしめように散歩を続けた。

広大なグラウンドは全て繋げると東京ドーム1個分のほどの
大きさになり、その広さをふんだんに使ってフリスビーを
楽しんだり、愛犬と一緒に駆け回ったりもした。

川のすぐ近くまで車で入り、全てのドアを全開にして
車の中から、サラサラと小川のように流れる水の音に
耳を傾けながら目を閉じると小川が優しくこう語りかけて
くるように聞こえた。

「あなたは自由に生きていい。今のあなたは充分素敵存在
だから無理をして、自分以外の者になろうとしなくてもいいの」

僕は自然の中に身を置きながら、少しずつ心と身体の元気を
取り戻していった。

透き通るように鮮やかな青色をした空を見上げると
そこには全身の力を全て抜いて自然体で優雅に浮かぶ雲が見えた。
真っ白の純白な色をした姿に思わず見入ってしまい
時間を忘れて、時を過ごした。

夕方になると、太陽が高度を少しずつ下げていくと同時に黄色からオレンジそして赤色へと変化していく姿を眺めていた。毎日、夕日を見ているとある事に気付いた。1日として同じ夕日の光景はないのだ。

この夕日が見せてくれる自然の天体ショーは、たった1日限りの自然からの大切な贈り物なのだ。全く同じ天体ショーは見られない。自然の作り出す、夕日と雲の素晴らしいショーは良い意味で鳥肌が立つほど感動し、思わず胸が熱くなりうれし涙が自然と溢れてきた。

生きているって、こんなにも幸せな事なのか！自然が教えてくれる数々の出来事は僕の心と体を優しく包み込み、愛という至上最高の癒やしでもてなしてくれたのだ。

人生で2度の大きな挫折。

技術社員失格の烙印を押され、体操教室では2度の怪我によって心と身体はボロぞうきんのようにやつれ、所々に穴が開き冷たい風が勢いよく吹いているかのようなようだった。

疲れ果て、何もやる気が起きず、絶望と落胆の日々を過ごす毎日。

空前の灯火だった心を、卵のようにつるんとしたツヤと張りそして桃のようにみずみずしくぷるんとした健康な心に戻してくれたが、自然の存在だったわけだ。

とりわけ、自然と言うのは癒やしの達人であり、人生の先生でもあるとこのとき思った。

すっかり元気を取り戻した後、ある事がきっかけで株取引を始める事になる。

ちょうど株市場は、日経平均が下げ止まりを見せ、少しずつ回復を見せていた時期だった。父はそのチャンスを冷静に判断し僕に資金を託したのだ。

とは言っても株の知識は全くなかった。どうやって株の取引をすれば良いか分からず、ネットや本を買い漁り必死になって勉強をした。チャートの見方や、専門用語の解説や取引全般のやり方、株の売り買いの仕方など・・・。

市場の流れが良い方向へと向かっていた事と、独学ではあるが勉強をしたおかげで、株取引を開始後わずか1ヶ月で10万円ほどの利益が出た。

特にこの年の年末には、海運株というものがのきなみ値上がりを見せ、あらかじめ仕込んでいた株たちは全て利益を出していた。

それに気を良くして、さらに株を買い増し翌年の春には40万円ほどの利益を出すまでになった。

このように良いタイミングで市場に参入をして、ほんの少しの勇気と資金で、資産はどんどん増えていった。1日に10万円の利益が出た時もあった。

さらに利益を狙うために、デイトレードという乱高下の激しいある意味、ギャンブル的な取引にも参入。たったの数分で2万、3万円の利益が出た時は、お金に対する感覚というか金銭感覚が麻痺していった。

そんな麻痺状態に気付かずに、調子に乗って取引を始めたころ損が出始めた。独断で決めた株の動きが激し過ぎて、一瞬で1万、2万と損をだし、あげくの果てわずか10分で10万円を損した事もあった。

そんな激しい値動きの取引を、ずっと続けられるほどの度胸はなかったなので、さっさと撤退し、通常の株取引へと戻ることにした。

その後、棒有名起業の株を30万円ほど買った。今はもう存在しない会社だが、その株が大当たりをして連日、高値を更新し続け、画面上では100万円利益を出していた。たった数日であつという間に、3倍ほどの利益に僕は天狗になった。

しかし・・・

人間の欲というのは恐ろしいもので、まだまだ上がると思い込んでしまい、冷静な判断が出来なくなり結局利益を確定する事なく損をしてしまった。

数年続いた株取引の生活だったが、損をする事が多くなり以前ほどの意欲もなくなっていき撤退を決めた。

市場と言うのは、残酷なもので情け容赦なく値段が上下に動く。この動きが上がれば良いのだが、下がった時の何とも言えない心がぎゅっと締め付けられる気持ちは、かなり気持ち悪く嫌な気分になる。

「雇われる事の真の恐ろしさを知る」

株取引から撤退をした後、様々な職を転々とした。

バイクリコールの修理や介護浴槽の組み立て工場、パン屋のバイト、そしてバイク修理の仕事など。

特にバイク修理の仕事は、過酷を遙かに通り超して地獄だった。生き地獄とは、まさにこういう事を言うのだろう！

朝9時から夜の9時すぎまで1日12時間以上働いて1ヶ月の休みはたった4日だけ。連休と言えど盆休みと正月休みが3日ずつあるだけの過酷な労働環境だった。手取りは、これだけ働いても20万もあれば良いほうだった。

社長の言う事には絶対に逆らえない。例え社長が間違っていたとしてもだ！

ここの社員たちは、社長の前では良い顔をしてニコニコし社長が居なくなると我先と彼の文句を言い続けた。

毎日、馬車馬のように働かされる。朝一から売り物のバイクを店頭に並べるわけだが、新車だから傷つけてはいけないしかと言って丁寧に並べていたら、時間がかかって叱られる。

教えられた通りに並べても、日によって並べ方のルールが社長の気分次第で変わるから、言う事がバラバラだから混乱した。朝から足は棒のようになり、時期は夏だった事もあり洪水のような汗を掻きながら、この過酷な労働に耐えた。

社長は気分の浮き沈みが激しく、極端に優しい時と裏を返したように突然、怒り出す事もしばしばあった。

それは僕に対してだけではなく、全社員に対してだったが社員たちは、自分が間違ってもいないのに怒りをぶちまけられ平気な顔をして社長のお説教を延々と聞かされていた。時には、暴力を振るわれる事も度々あった。

でもここの社員たちは、社長の前では何も反論できずただ耐えるしかなかった。

僕が唯一、ほっと出来たのは各市役所へお使いに行かされた時だけ。バイクを登録するための書類を持っていき、そこでナンバーをもらってくる仕事だ。

この時は、店から離れられるので嬉しくたまらなかった。

ここで働いてみて最も、驚いたのは社員に2つの顔があることだ。お客様には笑顔で接し、ニコニコと営業スマイルでお客様は神様です！みたいに対応をしていた。

ところがお客さまが帰ったと同時に態度が一変。「あんなバイク、よく買うなあ、アホちゃうか！」

さっきまでお客様に対して、これ以上ない笑顔で丁寧に対応していた社員が、裏を返すかのような変貌ぶりに僕は失望した。

バイク屋というのは、こういう世界なのか？表向きは良くても、裏ではお客様や売り物であるバイクの文句をたらたらと平気で言い合う社員たち。

この人たちは、どんな思いで仕事をしているのだろうか？と思ったと同時にこの職場は恐ろしい所だと思った。

長時間の労働（1日12時間は当たり前）に加え、手取りで20万円も満たない給料、しかも1ヶ月の休みはたったの4日だけ。

あげくにお客さまに対する態度の裏表を目の当たりにしてしまった。

彼らは社長にこき使われ、もはや人間とは思えなかった。
社長に都合の良いように使われるロボットのように見えてきた。
この人たちは、何を楽しみに人生を生きているのだろう？と
真剣に悩んだ時もあった。

彼らの人生は、オイルの焦げた匂いとタイヤのゴムの
匂いが漂う畳8畳と少しのスペースの中で、一度きりの人生が過ぎ去っていく
のだと思った。
すでに人間である事を捨て社長の言う事を忠実に聞く召使いのようにも
見えてきた。

僕はこんな風になりたくないと強烈に思い、覚悟を決めた。

その3ヶ月、社長からの突然の解雇通告。

こんな事を言うのもなんだが、正直嬉しかった。
もうあの地獄のような苦しみを味わなくもて良いと思うと
心の荷が降りたように思えた。

2週間ほど、また自由を楽しんだ。
収入がないと言うのと、お金が減っていく恐怖はあったが
それよりも、自由になる時間が手に入った事のほうが嬉しかった。
この経験による後遺症が残った。

しばらくは、バイク屋に対する不信感が消えることなく残り
店に行くのが怖くて仕方なかった。

今では、全てのバイク屋がこうではないと思えるようになり
店行く事も出来るようになった。
あのバイク屋を除いてだが・・・
この経験も、幸いにも良い思い出として心に残っている。

「自由への入り口」

さて、ここからのお話は、2つある。
どちらかを選んで見て頂きたいと思う。

●アフィリエイトや起業、副業など収入アップに興味のある人は・・・

「こんな世界もあったのか？」を見てください。

⇒<http://pma012519.com/gen.jitu.pdf>

●スピリチュアルが好き、興味がある方は・・・。

「素敵なサプライズ」を見てください。

⇒<http://pma012519.com/supi.pdf>